

お楽しみ会

2D病棟 福祉職



2月12日 永井さんと三枝さんを招待して音楽コンサートを開催しました。

ピアノの演奏に合わせて、「ビリーブ」や「さんぽ」、「おもちゃのチャチャチャ」「春よ来い」などの歌が披露されました。リズムカルな曲には、鈴やタンブリン、マラカスなどの楽器でリズムをとりました。歌声が聴こえ始めると、笑い声をあげる、

演奏者に視線を向けて、微笑むなど、利用者の様々な反応が見られました。会の終わりには、コンサートのお礼に、利用者が音楽活動で行っているハンドベルで「アルプス一万尺」を演奏し、とても喜んでもらうことができました。ご家族や他病棟からの参加もあり、賑やかな会を開くことができました。



お楽しみ会

3B病棟 布村ひかり



2月のお楽しみ会は、アンサンブル・ヴィーノさんをお招きしてトランペット、クラリネット、フルート、パーカッション、ピアノのアンサンブルコンサートを行いました。

2月の誕生者を生演奏の「ハッピーバースデー」でお祝いし、その後アンサンブルのコンサートを楽しみました。楽器紹介や

様々な曲を演奏していただき、特にジブリやディズニー等の聞いたことのある曲では、利用者もじっと視線を向けて笑顔で聴く姿が見られました。利用者の近くを回っての演奏もしてくださり、トランペットの華やかな音に目を大きくしたりと、普段はなかなか聴くことのできない管楽器の生演奏を楽しむことができました。



〒183-8553
東京都府中市武蔵台2-9-2
東京都立府中療育センター
電話 042(323)5115
FAX 042(322)6207

--*ホームページもご覧下さい*-*-*

<http://www.fukushi.metro.tokyo.jp/fuchuryo/index.html>

ひだまり

都立府中療育センター新聞 第566号 発行日 令和7年2月28日

第36回 地域療育講習会を開催しました

皮膚・排泄ケア認定看護師 北島直美

東京都立府中療育センター 第36回地域療育講習会	
重症心身障害児者の褥瘡管理について —Web配信—	
日時	令和7年2月14日(金)午後2時から4時まで
開催方法	Web配信(Microsoft Teams 使用)
対象者	障害児者の看護・介護・支援に関わる従事者や家族
司会	小児科部長 小森 穂子
ごあいさつ	院長 伊藤 昌弘 14:00~14:05
褥瘡とは	小児科医長 蔵野 亘之 14:05~14:25
事例を用いた褥瘡治療と予防	皮膚・排泄ケア認定看護師 北島 直美 14:25~14:55
褥瘡治療に用いる外用薬	薬剤師 薬剤科主任 河井 祐美 14:55~15:05
休憩	15:05~15:15
褥瘡予防のためのポジショニング	理学療法士 望月 剛江 15:15~15:35
褥瘡の栄養管理 栄養支援チーム(NST)との連携	栄養科 栄養科主任 竹内 典子 15:35~15:45
質疑応答	15:45~15:55
閉会	副院長 田沼 直之 15:55~16:00

令和7年2月14日に、第36回地域療育講習会をWeb配信により開催しました。今回は「重症心身障害児者の褥瘡管理について」をテーマに、褥瘡対策チームメンバーが講師となり取り組みました。蔵野医師は「褥瘡とは」、皮膚・排泄ケア認定看護師(WOCN)北島は「事例を用いた褥瘡治療と予防」、河合薬剤師は「褥瘡に用いる外用薬」、望月理学療法士は「褥瘡予防のためのポジショニング」、竹内管理栄養士は「褥瘡の栄養管理・栄養支援チーム(NST)との連携」を担当しました。褥瘡対策マニュアルに沿い、誰にでも理解しやすい内容としました。

63名の申込みがあり、医師、看護師、薬剤師、理学療法士、作業療法士、相談員、支援員、ご家族など様々な方に参加いただきました。アンケートでは、講義のわかりやすさについて「とてもわかりやすかった48%」「わかりやすかった52%」、感想では「様々な要因によって褥瘡ができてしまうことがあり、府中療育センターでは多職種で連携して予防やケアを行っていることが理解できた」などの貴重な意見をいただきました。

重症心身障害児者の褥瘡発生リスクは高く、日ごろ職員が細やかにケアを実施していても、褥瘡は発生するのだと振り返る機会となりました。支援の現場において褥瘡ケアについて治療計画を立てるチームが不在な場合であっても、重症心身障害児者のケアをする仲間と一緒にポジショニングを検討したり、DESIGN-R®2020評価★により治療を見直したりすることができるよう、講習会の内容を役立てていただきたいと思います。

また、困った際に相談できる窓口として今後もお役に立てるよう、皮膚・排泄ケア特定認定看護師として取り組みたいと思います。

★DESIGN-R®2020とは日本褥瘡学会が開発した褥瘡評価スケールです。褥瘡の重症度を分類するとともに、治癒過程を数値化することを目的に開発されました。



5名の講師

冬の企画「リアル&バーチャル体験！」

生活療育支援科 水嶋 暢

2月19日（水）、20日（木）に冬の企画を開催しました。今回は、コンピューターゲームでも有名な、自分が物語のキャラクターとなって冒険する、ロールプレイングゲームの中をリアルに体験する企画と、レンタルしたインタラクティブ・プロジェクターを使ったバーチャルゲームを体験する企画を、多目的ホールにて行いました。

リアル体験ゲームは、みんなが勇者になって、魔王に支配された村を救う使命を任されます。魔王を倒す呪文を手に入れるためには、所々にある難所の課題をクリアして、呪文のヒントを手に入れる必要があります。森の精霊から勇気の出る香りを嗅いでから、森に住む魔王の手下をシューティング（的あて）ゲームで撃退します。火山に困っている村のため、バズーカー砲を使いピンポン玉を転がして火の玉を蹴散らします。他にも恐ろしい大蛇の抜け殻や舌を触る、雪の樹林で冷たい風にも負けず結晶にあるヒントを探す、ゴーストが守る最後の呪文を勇者の杖で探す、などの課題がありました。最後に魔王を相手に手に入れた呪文を正しく使えたら、めでたく村を救って旅が終わりました。皆さん、盛りだくさんの内容を楽しみながら取り組んでいる様子がみられました。



バーチャルゲームでは、機器の中に入っているいくつかのアプリソフトから、「花火」「打ち出の小槌」「妖精」「バブル」というゲームを選んで体験してもらいました。床面とテーブルそれぞれに映像が映し出されて、映像の上を車椅子で通過したりボールを転がしたりすると、花火や小判が音とともにたくさん飛び出します。テーブルの上の妖精と泡バブルの映像を叩くとパッと消えてしまい、全部消すことができると「イイね」のマークが

映し出されます。直接の画面が見られない方には、その様子をカメラで撮って、壁のスクリーンに映し出すことにより存分に楽しめるように工夫をしました。通園のお子さまたちは、床の上を思う存分に動き回り、音と映像の効果を体験できて喜ばれていました。

「リアルとバーチャル」というゲームを、利用者だけでなくご家族や職員も楽しめたことと思います。多くの方々のご協力のもとでこの企画が開催されました。ありがとうございました。



緩和ケア認定看護師の紹介

緩和ケア認定看護師 荒谷智子

認定看護師とは、看護師として5年以上の実践経験を持ち、日本看護協会が定める600時間以上の認定看護師教育を修め、認定看護師認定審査に合格することで取得できる資格です。合格後は認定看護師としての活動と自己研鑽を積み、5年ごとに資格を更新しています。私は緩和ケアの分野で認定看護師の資格を取得して、現在9年目になります。私が資格を取得すると同時に、緩和ケアチームも立ち上がり、府中療育センターの内外でたくさんの方に会い、支えられてここまでやってこられました。

認定看護師の学校では、人生でこんなに勉強をしたことはないと思う位勉強し、実習に励んだ1年間でした。勉強は本当に大変でしたが得るものは非常に多く、今となっては宝物です。特に緩和ケア病棟での実習で受け持ちの患者さんからいただいた言葉は、看護師としてさらに成長するための大きな力となりました。今もその言葉を思い出して「さあ、がんばるぞ!」という気持ちにさせてもらっています。素敵な出会いにも感謝です。

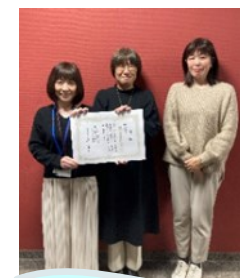
資格取得後は大学院で「死生学」を学びました。倫理学の教授に指導を受け、「重症心身障害児者の意思決定支援」についての論文を無事に完成させることができました。

緩和ケアの学校で「人は死ぬその日まで成長する存在である」と学びました。私自身もまだまだ成長し続け、これからも前向きにたくさんの方にチャレンジしていきます。

これから成長していく後輩の皆さんへ。看護師として対象者をケアするためには、時に勉強が必要なのがあるでしょう。自分の得意なことを増やしてみると、新たなことが見えてくるかもしれません。認定看護師の仲間が増え、共に成長していけると嬉しいです。

テーマ別改善運動合同発表会 特別賞受賞

QCサークル（SONA☆Ye11）代表 久保貴子



特別賞を受賞

2月19日に、「令和6年度テーマ別改善運動合同発表会」が開催されました。府中療育センター代表として、看護科と事務室の合同チーム「SONA☆Ye11」が参加し、「療育施設の災害対策～入所者に寄り添った備蓄を考える～」の発表で、特別賞を受賞することができました。

今回の取組では、センターの入所者にとって必需品であるおむつについて、災害時に必要な備蓄量や備蓄場所、ランニングストック方法について検討し、実際に備蓄を行いました。こうした取組の報告に対し、審査員からは、「おむつの備蓄の必要性について改めて認識することができた」、「自分の施設でもおむつの備蓄について考えなければならないと思った」といった意見をいただきました。

センターでは、今後もこうした取組を継続し、利用者に寄り添った防災対策に取り組んでいきたいと思っています。

